

2014年1月21日

2013年8月 Nr. 390

今回は、就職活動の苦勞がテーマですが、採用される側だけでなく、採用する側の取材をした上での興味深い内容の放送となっています。番組の制作担当者としては、テーマがテーマだけに取材を受けてくれる対象を探すのには大分苦勞したようですが、ようやくドイツ鉄道の人事担当者が受けてくれることとなります。彼女も実は、現在の鉄道会社に就職する前に70社以上もの会社で不採用となりながらも、いずれは人事担当としてどこかの会社に採用されるという希望を捨てませんでした。多くの会社への応募経験、言い換えれば、豊富な「不採用経験」がある彼女でしたので、おそらく現在の自分の業務について話す、この取材を受けたようです。

匿名を条件に取材を受けた別の男性は、人事担当者の職を希望し、あらゆる業種の200から300（大分幅がありますが）もの会社に応募をしましたが、まだ採用に至っていません。その際の不採用通知は大抵2日後に受け取っているとのことですが、その男性の知人は、不採用通知をインターネット経由で1時間後、時には数分後に受け取ったことが紹介されております。

また、印象的なのは、大手出版社の人事担当者である別の女性の経験です。彼女は、実習生1名と共に、数年前に何と5,500名もの応募者の採否の処理をしなければならなかったのですが、1名に掛けられる時間は、せいぜい2分程度でしかなかったということです。このような場合、日本であれば、人事担当者が大勢で手分けして、処理するところですが、業務分担が厳密に決められているドイツでは、そのように処理することができないのでしょうか。2分しか掛けてもらえない応募者は気の毒な気がします。

ところで、冒頭の「失業が増える」→「企業への応募が増える」→「企業の人事担当者の業務量が増える」という図式は、今まで意識していなかった点でしたが、改めて指摘してみると、確かにその通りだと思いました。そしてこれは、就職活動の厳しい現在の日本にも当てはまることではないかと思いました。

K. K.

2013年10月30日

2013年9月 Nr. 391

今回は、ドイツの大学の運営がテーマとなっており、大学も市場経済の影響を受け、競争と効率を追求するようになって来ていることが触れられています。この現象事体は、時代の流れとして止むを得ない、いやむしろ歓迎すべきなのかもしれません。しかしながら、ノルトライン・ウェストファーレン州のように大学が国（州）の監督から離れ、Wissenschaftsministeriumの監督下でなくなることが本当に良いことなのかどうか私には分かりません。少なくとも数年間は状況を観察しなければ評価することは難しいでしょう（そして、その結果によっては、同じ方式が他の州に拡大していく可能性も有り得るのではないのでしょうか）。

一方、ドイツにおいても大学の大衆化が進み、2012年の進学率は55%に達しているとのことですが、これは日本においても同じような状況です。両国で大きく異なるのは学費（または登録料）です。最近ではドイツでも年間12,000ユーロの学費を払って私立大学に通う学生がいるようですが、これはまだ少数派であるのに対し、日本ではその金額またはそれ以上の金額を学費として納める学生が多数を占めることです。従って、自分の子を大学に通わせている日本の親がドイツの国立大学ではわずかな登録料で済んだり、無償であることを知れば、非常に驚き、うらやましく思うに違いありません。

K. K.

2013年11月16日

2013年10月 Nr. 392

今回は、ドイツの新しい住居形態がテーマとなっております。その形態とは、学生向けを中心としたいわゆる *Wohngemeinschaft* を一般版にアレンジしたようなものですが、WG と大きく異なるのは、この集合住宅は WG より圧倒的に規模が大きく、かつその住居に住む住民がその設計段階から関与し、みずからの要望を取り入れることができることにあります。また、その土地および集合住宅の所有権は、入居者ではなく、有限責任会社にあります。それにしてもこの集合住宅の基礎を作るために 20 台ものコンクリートミキサー車が現場で一斉に作業したとのことですが、その様子は、さぞや壮観だったろうと想像します。

ドイツの「集合住宅」といえば、何年前に *Direkt aus Europa* においても取り上げられたことがありました。その時の「集合住宅」は、入居するためにまず組合員となり、生涯入居する権利を得るためにはある程度のまとまった金額を最初に支払う必要があったと思います。

今回の新 WG にしても以前扱った「集合住宅」にしても、家族の形態が時代とともに変化するにつれて生まれた新しい住居形態なのでしょうか。

K. K.

2013年12月27日

2013年11月 Nr. 393

今回は、イスラム教テログループがテーマになっております。その中で、ドイツで生活しているごく普通のイスラム教徒である若者が、どのようにテログループの一員となるかが描写されています。その若者たちに訴えるプロパガンダが、従来はアラビア語や英語で行われてきましたが、近年はドイツ語で行われるようになってきたことにより、より多くの若者がテロリストグループに共感し、参加するようになって来たと言及する専門家が居るとのことです。純粋な若者と外界から遮断された場所で共に問題を語り、彼らと共に歌い、各種講演、催事に参加してもらうことにより、連帯感を感じさせながら、彼らを巧みに組織に取り込んで行く様子が描かれています。私達が学生だった頃、やはり日本においても某新興宗教集団が似たような手法で学生を中心とした若者たちを仲間に入れていき、大きな社会問題になったことを思い出しました。

ところで、放送に出てきた Afghanistan の Hindukusch ですが、つい先日、ドイツの新国防大臣である von der Leyen 氏が兵士たちを激励するために同所を訪れたことがニュースになっていました。それにしてもメルケル首相が女性を国防大臣に任命するとは、大変驚きました。この閣僚人事は、ドイツの複数のメディアにおいても spektakulär と表現されておりましたので、内情をよく知らない日本人の私が驚くのも当然のことだと言えるでしょう。

K. K.

2014年1月12日

2013年12月 Nr. 394

今回は、Freyenstein という小さな町がテーマとなっています。この町は、人口 950 人ほどの Brandenburg 州の極小さな町ですが、13 世紀にはすでに存在し、その後消滅し、耕作地の下に埋もれてしまったということです。消滅したということでは、火山の噴火により埋没した古代ローマのポンペイに例えられていますが、この町の消滅は、どうも地形上の理由によるものと見られています。

この町の発掘は、当時まだ学生だった Thomas Schenk 氏が 1999 年に Freyenstein を仲間と訪れたことがきっかけでした。その後、彼は幾度となく同地を訪れ、発掘調査技師としてその後の発掘を手がけた結果、城塞、中央広場、舗装道路、地下室、井戸の跡など、町を形成していた主だった遺跡を発見していきます。彼らの発掘作業はとても地道なものだったと推測しますが、それだけに学問上重要なこの遺跡の発見をした時の驚きや喜びは相当大きかったものだったに違いありません（その時の彼らには、ひょっとしたらトロイの遺跡を発見したシュリーマンと同様の感激だったかもしれません）。

彼にとってはしかし、発掘作業はまだ完了していないようです。とういうのも、当時の信心深いキリスト教徒が教会に通っていたに違いないことを考えれば、その教会跡を発掘して初めて、彼の Freyenstein の発掘は完了したと言えるからです。彼らの今後の発掘作業の幸運を祈りたいと思います。

今朝の朝日新聞の報道により、1300 年前の津波跡を静岡県地学部の高校生たちが研究者とともに発見し、記録にない津波の存在を明らかにしたことを知りましたが、今回の課題に取り組んでいたため、この新聞記事をより興味をもって読みました。

K. K.